
ひぐらしのなく頃に歴～過去の記憶編～

kai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に歴々過去の記憶編々

【コード】

N1000Z

【作者名】

k a i

【あらすじ】

雛見沢に引越す前のレナの物語です。レナがこれまでの歴史を語る！

終わりの始まり

主人公

竜宮レナ（りゅうぐう

れな）

主人公の中学の友達

せがみなな
瀬上奈菜

side レナ

これは、レナが圭一（友達）君達と出会う前のこと。茨城に引っ越して中学3年生になった夏休み前日、レナは学校の帰り道はいつも友達と一緒に帰っていた。

「ねえ、レイナ（昔のレナの名前）ちゃん今度の休みどこかに出かけようよ」

この子の名前は、瀬上奈菜ちゃんせがみなな小学生の頃からの親友。転校して来たレナを歓迎してくれた。

「うんどこに行く？あっそうだ！最近できたばかりのケーキ屋さんがあるんだよ！今度そこ行かない？」

「そうなの！？行く行く」

奈菜ちゃんは、目を輝かせて言った。奈菜ちゃんは、ケーキが大好きでよく一緒に甘い物の話をしていた。

「はっかぁいいよぉお持ち帰りイイイイ！！」

「きゃっ！！もうレイナちゃん」

奈菜ちゃんは照れながら言った。そして、奈菜ちゃんと別れてまっすぐ家に帰って今日のことをママとパパに話した。2人はレナの話を楽しそうに聞いてくれた。ママが言った

「レイナは、本当にいい友達に恵まれたわね」

「うん!! 勉強も教えてくれるし困ったときは、助けてくれるし大好き!!」

ママは、微笑んで言った

「奈菜ちゃんを大切にしておいてね」

「うん!!」

こうして1日が過ぎていった。この後どうなるのか、レナも分からなかった

終わりの始まり（後書き）

勝手ながら、レナのストーリーを書かせていただきました。暖かい目で見てやってください

楽しく(前書き)

訂正が1つあります。1話でお父さんとお母さんなのにパパとママにしてしまったことです。すみません

楽しく

朝、目が覚めて想い浮かぶこと

「あれは一体なんだったのだろうか？」

「よく見えなかったけど誰かいた」

とりあえずベットから出て顔を荒い、髪を整えて、歯磨きをしたそしてお母さんとお父さんのいる部屋へ行って
2人に

「おはよう」

と言った

そしたら、

「おはよう」

と2人は言った

「良く眠れたか？」

とお父さんが言った

「うん！！よく眠れたおまけに奈菜ちゃんと旅行に行く夢をみたんだよ！！！」

「そうか、良かったな」

その時、お母さんが料理を運んできた
そして、こう言った

「夢を見るのはいいけどちゃんと現実も見てよね」

「むづううう！！ちゃんと見てるよ！！！」

その瞬間、どつと大きな笑い声であふれかえった

朝ごはんを食べ終わって奈菜ちゃんに電話をした

「今日、プールに行かないかな、かな？」

「うん、行く」

「あっそうだ！今日ね奈菜ちゃんの夢を見たんだよ」

「そうなの！？どんな夢？」

「えーとね、奈菜ちゃんとレナで温泉旅行してる夢をみたの！！浴衣姿の奈菜ちゃんかあい良かったな〜お持ち帰りいいしたかったな〜」

「そうなんだ・・・」

「じゃあ、9時に現地集合するね」

「うん、じゃあね」

「じゃあね」

急いでプールの用意をした。そして、自転車に乗って集合場所に行

った

集合場所に行ってみると奈菜ちゃんが待っていた

「ごめん、待った」

「ううん今、来たところ」

「じゃ、行っつか」

「うん」

レナと奈菜ちゃんが水着に着替えた

「はづううう！！奈菜ちゃんかぁいいいよぉお持ち帰りいいい！！」

「レイナちゃんやめてよぉもっ」

こうして楽しい1日は過ぎていった

その翌日、警察から電話があった

踪したという知らせだった

奈菜ちゃんの家族が失

楽しく(後書き)

本当にすみませんこちらの都合でいつ投稿するかわかりませんので、
ご了承ください

別れ

「そっそんな、奈菜ちゃんの家族が失踪するなんて」

「はい、詳しくはまだ分かりませんが、必ずご家族を探し出します」

この後、急いで奈菜ちゃんに電話をした

「奈菜ちゃん・・・大丈夫かな、かな？」

「うん・・・うん」

奈菜ちゃんの声は震えていた

「大丈夫、きっと見つかるよ!!」

「うん」

レナは、必死に奈菜ちゃんを慰めた

「何かあったら、電話して」

「うん、ありがとう」

「じゃあね」

「じゃあね」

電話を切りレナは思った

「神様どうか奈菜ちゃんの家族を助けて!!」

奈菜ちゃんの家族がいなくなってもう夏休みが終わろうとしていたある日1本の電話があった

「瀬上さんのご家族が遺体で発見されました」

ショックだった、でも、レナ以上にショックを受けたのは、奈菜ちゃんだったと思う

奈菜ちゃんは、夏休みが終わっても学校に来なかった

後で聞いた話だけど、奈菜ちゃんの家族は、借金があってレナが奈

菜ちゃんとプールに行った時に川で自殺をしたそうなの
ある日、何か大きな声が聞こえて目が覚めた
声が聞こえてくる方へ行ってみると
お父さんとお母さんが何か喧嘩しているようだった

「おい、この男はどこのどいつだ!!」

「違うわよ!!この人は仕事で一緒なだけ!!」

「だったらなんだこの写真は!!」

「普通仕事と一緒にだけで腕を組むか？」

「誤解よ!!」

「もうやめて、やめて!!」

レナは心から、思った
そんな毎日が続いたある日、奈菜ちゃんが登校してきた
レナは、うれしさと不安が同時にきた

「奈菜ちゃん・・・」

「おはよう！レイナちゃん」

「うん！！おはよう！！」

奈菜ちゃんは元気そうに振舞っていたが、本当はまだ辛いのだと分かった

なるべくあの時のことをいわないように気をつけた

この時、奈菜ちゃんが来てくれてとつても助かった

なぜなら、お父さんとお母さんが喧嘩をしてるからだった

「最近、お父さんとお母さんが喧嘩してるのレイナどうしたらいいのかな、かな？」

「うーん、ここはやっぱりレイナちゃんが止めに入るしかないよ」

「でも、大丈夫かな、かな？」

「大丈夫だよ！！」

「ありがとう元気が出た!!」

「ぶっ倒れてしまった」

別れ（後書き）

次から、もう少し文を増やしてみたいと思います

夢

目が覚めた時、まだ夜の3時だった、その瞬間上から誰かがレナを見ていた。暗くてよく見えなかったけどレナにこう言った

「今すぐ雛見沢に帰りなさい」

これを聞くとレナは眠ってしまった
今度起きたときは、朝だった

「あれは、一体なんだったのだろう」

「前にもこんなことがあったような・・・」

そんなことを想いながらもレナは着替えて学校に行く準備をした
そしたら、お母さんとお父さんの喧嘩が始まった

喧嘩の内容はいつも同じお母さんが浮気をしてるかしてないかだった
レナは、奈菜ちゃんに言われた通りにこう言った

「喧嘩はやめてよ！！レイナは、お母さんとお父さんが喧嘩してる
所なんてみたくないよ！！！！」

2人は、黙り込んだ

「ごめんな、レイナもうしないよ」

「お母さん達が悪かったわ」

2人は、色々反省したような顔だった

「ううん、分かってくればいいよ」

「じゃ、学校に行ってくるね」

「レイナ朝ごはんは？」

「じゃ、行ってきまーす！！」

「あっ！！もう」

レナは、がんばって走った時間まで残り3分、何とか校門に入って下駄箱に靴を入れてシューズに履き替え、ダッシュで走って行き教室に着いた。教室に入って椅子に座った瞬間にチャイムが鳴り出し

た。

「危なかった」

「レイナちゃん珍しいねこんなギリギリに来るなんて」

奈菜ちゃんは、レナの前の席で授業中によく話しては、先生に怒られていた

「うん、ちょっとお父さんとお母さんを叱ったら遅れちゃって」

「そうなんだ、良かったね、言いたいこと言えて」

「うん！！これも奈菜ちゃんのおかげだよ、ありがとう」

「わたしは、友達として当然のことをやっただけだよ」

その瞬間、安心したせいかなレナからお腹がぐうううと鳴ったみんな、啞然としてレナの方を見ていた

レナは、顔がカアアアと熱くなるのを感じた

「そっいえば、朝何も食べてなかったんだっけ」

「いつものレイナちゃんだったらかあいよいよお持ち帰りいいって言うのにね」

「それを、言わないで〜」

授業中にもお腹の音がなるたびにみんながレナの方を見ていたその日の帰り奈菜ちゃんと一緒に今日の話をしてた

「もう、本当に恥ずかしかったよ〜」

「うん、すごい鳴ってたねもう笑いをこらえるのに必死だった」

「むづうう!!!奈菜ちゃんのイジワル〜」

「うそだよ〜」

しばらくこんなことを話して奈菜ちゃんと別れたそれで、空を見てみたら夕日がすごくきれいだった。まるで真っ赤な血みたいに

夢（後書き）

徹夜してつくりました。おかしな点等がありましたら、コメントください

悪夢

10月になってもう学校では、衣替えの季節がやってきた。ある日、学校から帰る途中奈菜ちゃんがレナにある提案をしてきた。

「ねえレイナちゃん、今度の土曜日紅葉見に行かない？」

レナは、ビックリした。いつも出かける時はレナが誘うのに今回は、奈菜ちゃんから誘ってきたの

「うん！！行く！！でも珍しいね奈菜ちゃんから誘ってくるなんて」

「実は、今年の紅葉とても綺麗らしいからレイナちゃんと一緒に見たいな」と思ってた

「そうなんだ」

「じゃあ、わたし家ここだから」

「うん、じゃあね」

「バイバイ」

レナの家は、もう少し先だから今までであったことを、思いだしていた。奈菜ちゃんの家族が自殺したことや、お母さんとお父さんが喧嘩していたことや、夜に見るあの夢など。その時、後ろから足音が聞こえた。「ひた、ひた」とまるで裸足で道を歩いているかのような音がした。振りかつてみても、誰もいなかった。気のせいだと思いついてまた歩きだしたその時、また「ひた、ひた」と音がしてまた振り返ってみた。でも、誰もいなかった怖くなったレナは全速力で走った何度も転びかけたけど走るのをやめなかった。ようやく家が見えてすぐに、家の中に入った。そして、自分の部屋へ行きベットに倒れこんだ。

そして、ようやく出た一言は、

「なんだったの今の？」

その時、

「おかえり」

お父さんだった

「うん、ただいま」

「どうしたレイナ顔色が悪いぞ」

「大丈夫、なんでもないよ」

「そうか」

お父さんは、あんなふう言ってるけど心配そうにレナを見ていた
すぐにレナは、お風呂に入り夕飯も食べて寝ようとしていた。けれど、
ど、どうしても今日のこと忘れられなかった。何時間くらいたっ
たのだろう。時計を見たら夜の3時になっていた。その時上から黒
い影みたいなものが出てきてレナにこう言った

「今すぐ雛見沢に帰るのです」

「いや・・・いやーーーー！！！！」

レナは、何がなんだか分からなくなっていた
その瞬間、

「どろしたレイナ！！」

お父さんとお母さんが来て言った

「そこに、黒い影がいるの・・・」

「何もいないじゃない」

気づいたら黒い影はいなくなっていた

「ちつきままでここにいたよ!」

「レイナはきつと疲れているのよ。ちゃんと寝て疲れをとりなさい」

「……うん」

「おやすみ」

「……おやすみ」

この悪夢がレナの人生を大きく変えることなどレナも分からなかった

悪夢（後書き）

この話も、徹夜で書きました。何かアドバイスをもらえたら幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1000z/>

ひぐらしのなく頃に歴～過去の記憶編～

2011年12月6日20時53分発行